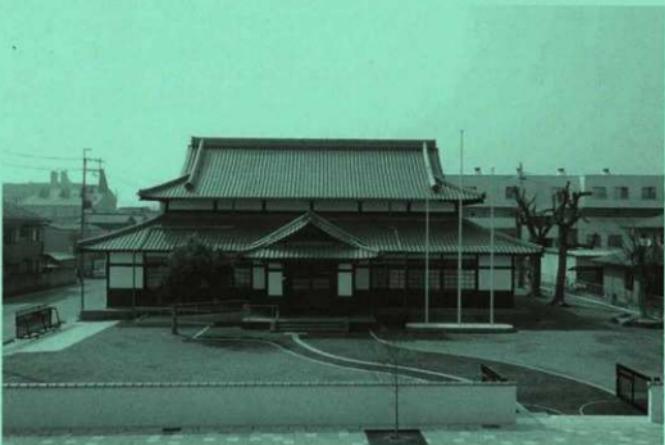
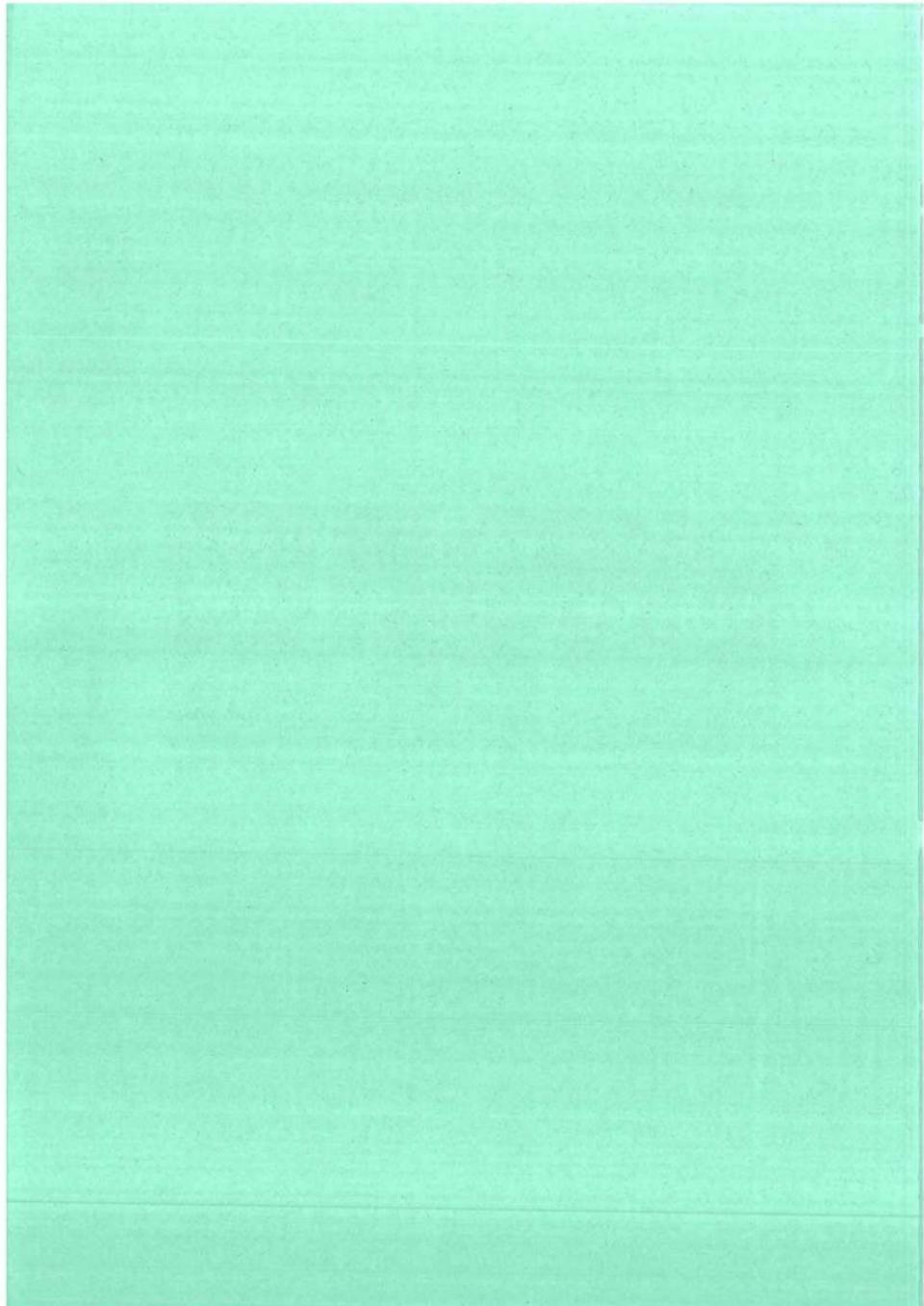


島本町立歴史文化資料館 館報第 12 号



令和 3 年 3 月

島本町立歴史文化資料館



はじめに

平成 20 年 4 月 12 日に島本町立歴史文化資料館がオープンして、早 12 年の月日が流れました。昭和 16 年、有志の方々のご尽力で桜井駅跡記念館「麗天館」として建てられた本館は、全体的には簡素ではありますが、日本の伝統的な社寺建築の要素を用い、地域の歴史を象徴する風格のある会堂建築として、多くの方々を迎えてきました。

令和元年度は 6 つの企画展を実施し、春には企画展「水無瀬神宮の社宝」を開催しました。平成 30 年度に完成した水無瀬神宮が所有する国宝 2 点の複製品を中心に展示を行い、延べ 1,273 人と多くの方に来館していただきました。

秋には企画展「鈴谷瓦窯跡と東大寺」で帝塚山大学附属博物館と共に展示しました。本館所蔵の瓦と他地域の瓦を比較することにより、既存の資料も新たな側面から見ていただくことができたのではないかと思います。

その他にも、「町内発掘調査成果速報展」、「水無瀬駒 関連資料」実物展示、「島本の神事」、「むかしのくらしと農家のしごと」といった企画展を開催しました。住民の皆様をはじめ多くの方々から関心をお寄せいただき、延べ 6,000 名を超える方々に入館をいただきました。

これらの企画展に伴い水無瀬神宮宮司 水無瀬 忠成氏のご講演をいただいたのをはじめとして、7 つの講演会を実施しました。講師の先生方並びにご参会いただきました皆様方に厚く御礼を申しあげます。

本資料館の立地条件の良さと、伝統的な日本建築の雰囲気を活用した資料館コンサートも 7 回実施し、通算 87 回を迎えました。様々なジャンルのコンサートが開催できること、たくさんの方々のご支援を賜ったことに感謝の意が堪えません。

公募による施設使用につきましても、たくさんのご利用をいただきました。今後も地域に溶け込んだ活動を応援する施設であり続けたいと思っております。

本稿では、令和元年度の本館の活動を報告することで、皆様方へのお礼と代えさせていただきたいと思います。今後の益々のご支援・ご協力を、心からお願い申し上げます。

令和 3 年 3 月吉日

島本町立歴史文化資料館
館長 賴田 和典

目 次

| | |
|-----------------------|---------------|
| はじめに | 1 |
| 講演会 | |
| 「後鳥羽上皇と水無瀬神宮」 | 講師 水無瀬 忠成 氏 3 |
| 「国宝 後鳥羽上皇像と鎌倉時代の肖像画」 | 講師 井並 林太郎 氏 4 |
| 「後鳥羽天皇の書」 | 講師 羽田 聰 氏 6 |
| 「世界最古の写真印刷技法 コロタイプ技法」 | 講師 山本 修 氏 8 |
| 「島本町と東大寺」 | 講師 木村 友紀 氏 10 |
| 「水無瀬駒製作と時代背景」 | 講師 小泉 信吾 氏 12 |
| 「やさしい古代瓦の歴史」 | 講師 清水 昭博 氏 14 |
| 展示 | |
| 企画展「水無瀬神宮の社宝」 | 16 |
| 企画展「町内発掘調査成果速報展」 | 17 |
| 企画展「鈴谷瓦窯跡と東大寺」 | 17 |
| 企画展「島本の神事」一尺代・大沢 御頭渡し | 18 |
| 企画展「むかしのくらしと農家のしごと」 | 18 |
| 企画展「水無瀬駒 関連資料」実物展示 | 19 |
| 体験講座 | |
| 「瓦ストラップ・マグネットづくり」 | 19 |
| 「瓦拓本体験」 | 19 |
| 事業報告 | |
| 企画展・催物一覧 | 20 |
| 公募による催物一覧 | 20 |
| 入館団体 | 21 |
| 利用状況 | 21 |
| 寄贈・寄託 | 21 |
| 町指定文化財一覧 | 22 |

講演会 「後鳥羽上皇と水無瀬神宮」

令和元年6月1日（土）

水無瀬神宮宮司

水無瀬 忠成 氏



どうもみなさんこんにちは。水無瀬神宮の宮司をしております水無瀬と申します。今日は本当に忙しい中たくさんの方がこの麗天館にお集まりいただきましてありがとうございます。

水無瀬神宮というのは、皆さま方御存じの通りこの島本をこよなく愛された第82代後鳥羽天皇さんが、ここにお住いになられて離宮をつくられました。

後鳥羽天皇が天皇におつきになったころは、源頼朝が鎌倉に幕府を開き、頼朝が亡くなった後は子どもの頼家が専制をされまして、外戚の比企能員の勢力だったわけでございます。頼家が亡くなると、北条時政が頼家の弟の実朝を三代目の將軍に掲げますが、実朝も頼家の息子公暁に暗殺されるという政権争いがありました。その時に後鳥羽天皇は院宣をだして倒幕の計画を立てるわけですが、それを承久の変といいます。残念ながら上皇方は敗れ、後鳥羽天皇さんは隠岐の島に移され、その時に参画されました順徳天皇さんは佐渡へ、土御門天皇さんは土佐へとそれぞれ遠隔の地に移されてしまいました。しかも後鳥羽天皇さんは水無瀬に帰ることなくして、隠岐島でお隠れになっていたわけで、その時に付いておりました藤原能茂が御靈を水無瀬の地へ移して、御祀り申し上げたわけです。その後は現在までずっと御祀りしております。

今回は、国宝の「後鳥羽天皇像」と、「後鳥羽天皇宸翰御手印置文」の2点の複製が、便利堂さんによってできあがっております。「後鳥羽天皇像」を描かれましたのは、藤原信実という似絵師です。それともう一点、「後鳥羽天皇宸翰御手印置文」は、水無瀬信成、親成氏親子に対しての私が亡くなった後はずっと弔って御祀りするようにという遺言状のようなものです。ですから、800年前から今まで御祀りしてきた水無瀬家の先祖に敬意と感謝をしながら、後世にずっと続けていくという想いに改めて駆られます。

順徳天皇さんが佐渡に移られたときに詠んだ歌の中に「いかにして契りおきけむ白菊を都忘れと名づくるも憂し」というものがあります。これは自分がお住まいになっている行在所の近くに、後鳥羽天皇さんが大変好まれている白い野菊が咲いていて、これを都忘れと名付けたという歌です。この佐渡に咲いている菊を、水無瀬の地に移しまして、現在も境内には都忘れる菊が生えております。ですから今も月次祭の22日、これはちょうど天皇さんがお亡くなりになった日なんですが、その日には菊の花をお供えしています。

境内の建物では、茶室と客殿が重要文化財になっております。平成28年度には、本殿、拝殿、幣殿、神庫、手水舎、神門、築地塀、神宮の境内の建物が全て国の登録有形文化財に登録されました。水無瀬神宮に参拝されましたら、私いつでもおりますので何かありましたらご質問等たまわればと思います。ご清聴ありがとうございます。

講演会 「国宝 後鳥羽上皇像と

鎌倉時代の肖像画」

令和元年6月2日（日）

京都国立博物館 学芸部企画室研究員

井並 林太郎 氏



今回、「後鳥羽上皇像」の複製を資料館で作られたということで、実物と違わぬ大きさや色合いを感じていただければと思います。輪郭は細い線を重ねて描かれていて、毛の生え際1本1本まで非常に細かく描いている作品です。それでは、「後鳥羽上皇像」の歴史的な背景や美術史の中どれだけ重要な作品なのかを紹介していきたいと思います。

後鳥羽天皇を描いた作品は、水無瀬神宮に、国宝「後鳥羽上皇像」と「後鳥羽法皇像」があります。さらに宮内庁にも「後鳥羽上皇像」があり、宮内庁三の丸尚蔵館蔵の「天子摶闊御影」、徳川美術館蔵の「天皇摶闊影」、京都国立博物館蔵の「時代不同歌合絵」などがあります。

まず、水無瀬神宮の国宝「後鳥羽上皇像」にかかる文献を紹介します。『吾妻鏡』承久3(1221)年7月8日条、承久の乱で敗れた後鳥羽天皇が出家の姿を藤原信実という絵師に描かせたと書かれています。これが現存する国宝「後鳥羽上皇像」に該当すると伝えられています。似たような記録が、『承久記』にもあり、同じく7月8日に、こちらは出家後の姿を描いたと記されています。さらに、後鳥羽天皇の靈託をまとめた『後鳥羽院御靈託記』には、天皇の俗体影と法体影が1幅ずつあったと記されています。次に、後鳥羽天皇が隠岐で、「時代不同歌合絵」を作られたと考えられているのですが、先ほどの『後鳥羽院御靈託記』に、「時代不同歌合絵」に描かれた自分の姿を水無瀬の御影堂に掛け欲しいと後鳥羽天皇から靈託が下ったと記されています。また、和歌と後鳥羽天皇の肖像との関係として、宮内庁蔵の「後鳥羽院上皇像」を掛けた前で和歌を詠んだ事が分かっており、人麻呂影供の影響で生まれた後鳥羽院影供だと言われています。これらの後鳥羽天皇の肖像画をいくつか見ると、ほぼ同じお姿をされているので、元となる絵があったのではないかと思われ、それが国宝「後鳥羽上皇像」である可能性が考えられます。

平安時代の終わりから鎌倉時代には禅宗が日本に入ります。禅宗では肖像画を頂相とよびました。中国南宋の肖像画は、細部に至るまで入念な描き方をする作品が多く、日本でもこれに倣つてリアルな表現が行われるようになります。一方、平安時代の終わりから、俗人の見た目を描き分ける似絵が生まれます。これが頂相とともに興った、鎌倉時代の肖像画美術のもう一つの大きな流れです。

似絵の具体的な例に、「公家列影図」という、公卿の肖像画を描いた作品があり、細い線を重ねて個人の容貌をとらえています。国宝「後鳥羽上皇像」も細かい線を重ねて描かれており似絵の作品の代表作と考えられています。鎌倉時代、宫廷の仕事は世襲でした。似絵も世襲によって受け継がれた技能で、その祖・藤原隆信は、平安時代の終わりから鎌倉時代にかけての人物です。『玉葉』という九条兼実の日記の中に、承安3(1173)年、後白河院の御所や、その妃である建春門院の御所に平野神社や日吉大社、または高野山に行かれた時の図が描かれたと記録に残っています。お付きの方も多く、隆信がそれぞれの人達の面貌を描いたと書かれています。これが似絵の歴史の

展示

企画展 「水無瀬神宮の社宝」

展示期間：令和元年6月1日（土）～7月21日（日）

新しい年号「令和」が4月1日に発表となり、令和元年、第1回目の企画展開催となりました。

「水無瀬神宮の社宝」と題し、平成30年度に作成した国宝2点（後鳥羽天皇像、後鳥羽上皇宸翰御手印置文）の複製完成を記念して、水無瀬神宮が所蔵する様々な文化財の写真パネル展示を行いました。

複製の作成は、本町の念願ともいえるもので、完成によって、普段は観ることができない国宝の文化財を複製品として資料館でいつでも見ることができますようになりました。

作成にあたっては世界最古ともいえるコロタイプ技法を持つ企業に依頼しました。

水無瀬神宮が所蔵する国宝に初めて出会う方も多く、講演会や展示にはたくさんの方が来館されました。

「承久の変」後、上皇は島根県の隠岐の島に移られ、その地で亡くなりました。国宝、重要文化財等の展示に加え、隠岐の島にある後鳥羽上皇関連遺跡や、複製の完成に至るまでの作成過程を写真パネルで紹介しました。



後鳥羽上皇宸翰御手印置文（複製）



紙本着色 伝藤原信実筆
後鳥羽天皇像 （複製）



れだけ、全国の国々でも瓦を作る技術が進歩していたと寝えます。

藤原宮は710年に平城宮に移ります。平城宮の瓦は、藤原宮の倍の約400万枚が必要だったと考えられていて、宮北方の奈良山丘陵あたりで瓦を作ったということがわかっています。平城宮の瓦は一ヶ所で作ったので色や形が非常に整っています。平城京に都を遷した頃の窯は飛鳥寺の時と同じで、山の斜面にトンネルを造る形の登り窯です。これが飛鳥時代から奈良時代の前半くらいまでの窯の特徴です。しかし奈良時代後半、東大寺が作られる時期には、床が平らで瓦を一定の温度で焼ける機能性の高い平窯が登場します。

東大寺の瓦は、基本的には飛鳥時代以来の複弁蓮華文が踏襲されています。非常にダイナミックで美しいデザインをしています。東大寺が造られる少し前の天平20(748)年に、造東大寺司のなかに造瓦所という役所が作られました。その時に東大寺スタイルの瓦が作られて、奈良時代の大きな寺の瓦のデザインに踏襲されていきます。奈良時代後半、全国各地にお寺が作られていますけれども、そこにもこのスタイルが広がっていきます。

次に、島本町の鈴谷瓦窯が古代瓦の歴史の中にどのように位置づけられるのかをお話します。鈴谷瓦窯は、島本町の山崎で発見された、山の斜面に掘られた登り窯です。窯の構造から、奈良時代前半より古い窯であることがわかります。そして、出土した瓦の表面に叩いたらしい痕跡があることから、鈴谷瓦窯の瓦は飛鳥時代後半に作られていると考えられます。

そうしますと、鈴谷瓦窯の瓦はどこに運ばれたのか、大きく分けると可能性は3つあると思います。候補のひとつは、島本町の鈴谷瓦窯から直線距離で3.6キロのところにある飛鳥時代に建てられた梶原寺です。ただ、梶原寺の近くに瓦を作った登り窯が見つかっていて、飛鳥・奈良時代を通じて梶原寺は自分のところで瓦を作っています。さらに、天平勝宝8(756)年に、東大寺の瓦を梶原寺に6千枚頼んだという記録があり、他の寺にたくさんの瓦を供給できるくらい瓦作りの技術を持っていた寺なので、鈴谷瓦窯の瓦が運ばれた可能性は低いという印象を受けます。

第二候補は、大山崎町の山崎院(山崎廃寺)です。鈴谷瓦窯と山崎院との距離は1.5キロと近接した位置関係にあり、山崎院に鈴谷の瓦が運ばれた可能性がいちばん考えられるのではないかと思います。『行基年譜』によると、山崎院は、天平3(731)年に行基が建立した寺ですが、その前身の寺が確認されています(山崎廃寺)。実際に、山崎院に関わる遺跡から飛鳥時代後半の瓦や埴仏、塑像、壁画が見つかっていますので、近くに仏像を安置したお堂があったというのは確実です。山崎廃寺と時代的に合っている鈴谷瓦窯の瓦も、その立地から、山崎廃寺に使われるため作られた瓦だという可能性は高いと思います。

最後に、これは可能性は低いと思いますが、孝徳天皇の山崎宮です。孝徳天皇は、記録によると、仏教を厚く信仰していたので、もし山崎に宮を置いたならば、当然仏教施設もその場に造っただろうと想定できます。その場合、仏教施設に使った瓦が出土する場所はあると思います。年代的には鈴谷瓦窯の瓦は飛鳥時代後半の7世紀の半ばから7世紀終わりのものなので、孝徳天皇の山崎宮の瓦であってもおかしくないと思います。反対に鈴谷瓦窯の近くに山崎宮が建てられた可能性もあるのではないかということです。

瓦の破片だけで答えを出すのは難しく、鈴谷瓦窯の謎を解くはっきりした答えは出ていません。いずれにしましても、鈴谷瓦窯から見つかった瓦は、島本町の古代の歴史を考える上で重要な資料だと思います。これからも大切に保存していただければと思います。ありがとうございました。

講演会「後鳥羽天皇の書」

令和元年6月16日（日）
京都国立博物館 学芸部美術室長
羽田 聰 氏



皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあづかりました京都国立博物館の羽田と申します。

我々が普段使っている文字の役割は、「読む」、あるいは「見る」の二つ考えられまして、今日は、造形美としての文字を文献や作品から見てみようと思います。

後鳥羽天皇の作品は、和歌、日記、消息類の三つに分かれます。建久9（1198）年8月以後、熊野詣の際に詠まれた和歌は「熊野懐紙」と呼ばれ、後鳥羽天皇の宸筆が5枚あります。後鳥羽天皇の字は、非常に墨色が濃く、起筆が力強く、線の強弱を使い分けているという特徴があります。後鳥羽天皇の日記に残されている文字も、この3つの特徴は当てはまります。消息類は、東山御文庫蔵の「後鳥羽天皇宸翰事書」と、水無瀬神宮蔵の国宝「後鳥羽天皇宸翰御手印置文」があります。置文は後鳥羽天皇の絶筆で、暦仁2（1239）年2月9日に書かれています。そばに仕えていた水無瀬親成の土地の安堵を自らの手で書き記し、文書の効力が確かなものとなるように朱の御手印を押しています。後鳥羽天皇は承久の乱における敗者というイメージがあると思うのですが、自分に仕えた近臣の恩に報いようとしたための置文を見ると、後鳥羽天皇は、君臣の道に対してしっかりとした考えを持っていたのではないかと考えています。こうした書の特色を踏まえたうえで、天皇と書はどういう関わりがあるのかを見てまいります。

後鳥羽天皇の文字については、個人的には歳を重ねていくに従って洗練されてきているという印象を持ちます。他の天皇の例では、江戸時代の桜町天皇の文字が残っています。桜町天皇が即位する前の12歳の時、享保16（1731）年に行われた歌会で詠んだ和歌の文字は、非常に大きな字粒で幼さが残る字ですが、寛延2（1749）年、30歳の時に弟に宛てた手紙の筆跡は、大分進歩が見られます。昔の人にとって、特に天皇にとって、歌がうまく詠める、字がうまく書ける、楽器がうまく弾けることが非常に重要です。先ほどの桜町天皇のめざましい進歩の背景には、日々の弛まぬ鍛錬があったわけです。

「手習始」という出来事が天皇と書との関わりの始まりです。『後深草天皇宸記』の建治2（1276）年の記事に、能書として有名な伏見天皇の手習始に関する記事があります。伏見天皇が12歳の時、手習始が行われ、三蹟の一人として名高い藤原行成の書が手本として選ばされました。天皇の手習始に関する史料が残っているのは、堀川天皇から始まって崇光天皇まで、平安時代から南北朝時代まで8名の天皇です。その方たちがどの手本を用いたのかというのを見てまいりますと、例えば、堀川天皇は小野道風の筆跡を手本とし、高倉天皇と後宇多天皇は藤原忠通を手本とし、伏見天皇は、先ほど藤原行成と出てまいりましたが、『経俊卿記』によると小野道風を手本としたとも書かれています。崇光天皇は、小野道風を手本にしています。日本の書の流れの中で小野道風、藤原行成は、藤原佐理とともに、和様の書の大成者として三蹟に数えられます。藤原忠通は、三蹟により大成された和様をさらに展開させた人物です。いずれにせよ、天皇が手習始をするにあたって、古の能書、

中で文献上一番最初の事例です。藤原隆信の作品は他にも、承安年間におこなわれた儀式の絵を描いた「承安五節絵」や、「法然上人像」が記録・伝承として残っています。さらに、神護寺に伝わる「伝平重盛像」、「伝源頼朝像」などが『神護寺略記』に藤原隆信が描いたものであると記されています。それだけ伝説的な画家であったということがわかります。

隆信の子が、国宝「後鳥羽上皇像」を描いたと考えられる藤原信実です。儀式などを記した「中殿御会図」や「隨身庭騎絵巻」も信実が描いたといわれています。後鳥羽院の肖像画と似たようなタッチで描かれているところがあり重要な作品です。文献上で確認できる信実の作品には、「水無瀬殿の四季の絵」、「新日吉小五月図」があります。歌人の姿を描いたという記録も残っていて、歌仙絵の中でも優れたものといわれる「佐竹本三十六歌仙絵」や、「柿本人麻呂像」、国宝「北野天神縁起絵巻」も藤原信実筆という伝承が残っています。鎌倉時代の優れた作品なら信実筆だろうという鑑定がされてきた歴史があり、それだけ信実は当時、重要な作家であったといえます。

さらに信実の曾孫の藤原為信に関する記録や作品も残っています。三の丸尚藏館蔵の「天子撰閨御影」のうち天皇を描いた一巻は、為信が手掛けたと考えられています。また賀茂祭の様子を記録した「文永賀茂草子」は、記録画も手掛けていたことがわかる作品です。天皇の肖像画ですと、法住寺に伝わる後白河法皇彫像の胎内に後白河法皇を描いた画像が折り畳まれて入っていて、その裏に小さくこれを描いたのは為信卿であると書かれていました。後白河の御顔を「天子撰閨御影」と比べるとかなり似ているので為信のものと考えられています。

為信の子の豪信は「天子撰閨御影」の撰閨と大臣を担当しています。親子で分担して作ったということです。国宝「花園法皇像」も描いています。この豪信の後には、作品、文献史料ともに似絵の画家が活躍した形跡はなくなってしまうのですが、このように似絵の画系は平安時代の終わりから南北朝時代まで続き、天皇の肖像画や儀式、行事の記録、風景画や三十六歌仙など歌人の姿を描いたということが文献や史料からわかります。

どうして似絵の画系が鎌倉時代を中心に活躍したのかを考えると、やはり天皇の姿や儀式のありさまを後世に残していくという機運が非常に高まつたからだと思われます。天皇の姿でいえば、大画面の絹本といった本格的な肖像画を作る時は、お手本をもとに、計画性のある構図で描いていくのですが、一方で似絵の作品はその場で姿を写したことが非常に重要で、後世の人たちにとっては由緒あるお手本として価値をもつのです。この「後鳥羽上皇像」はまさに目の前で描いたと伝えられる作品だからこそ国宝になっているわけです。似絵が鎌倉時代、目の前の人や特定の行事を描いていることが重要な意味をもってくるわけで、この作品が大事にしていかなければならないものだということがお分かりいただけるかと思います。

なぜ後鳥羽院は信実に自分の姿を描かせたのかということについてもいろんな解釈がありまして、やはり、お母様の七条院に出家前の姿を留めておき、それを渡したかったという人もいますし、承久の乱で負けたけれども、天皇としての矜持を失っていない自らの姿を残して後世の天皇たちに示したかったという人もおります。歴史の文献ともあてはめていろいろ想像を巡らせていただきたいと思いますが、とにかく、後世たくさん作られた後鳥羽院の肖像画の、おそらく大元になった可能性の高い画像がこの作品です。今回は地元で身近に見ていただけるという貴重な機会だだと思ってますので、作品に親しんでいただければと思っております。ありがとうございました。

中でも和様を形作った人たちの遺したものを使っているということです。

東京国立博物館蔵の国宝、藤原行成筆「白氏詩卷」は、伏見天皇がそばにおいて大事にしていたものです。そして、小野道風が屏風に揮毫した漢詩の下書き「屏風土代」を見ながら、伏見天皇の臨模したものが御物の「屏風土代臨模」です。行間の取り方や字の強弱をそのまま写し取っている事が分かります。伏見天皇は手習始から、古の名筆を一生懸命勉強することによって、歴代天皇の中でも1、2を争う字の上手い天皇として評価されるようになりました。どんな天皇であっても、書の技術を上達させていくには、幼いころからの手習始に始まり、それ以後欠かさず行った修練があるというのがおわかりいただけると思います。

では、後鳥羽天皇の書は、どんな人の手本がバックグラウンドにあるのでしょうか。『入木抄』という南北朝時代の書道の指南書に「弘法大師から始まり、小野道風が登場して以降は道風の書風が一世を風靡し、その後を受けた藤原行成は、小野道風の書風に倣っているけれども、行成自身の個性を發揮している。その後、藤原忠通が現れてから、ことごとく藤原忠通の書風となり、後白河天皇以来、後嵯峨天皇の頃まで忠通の書は大変に珍重された。さらにこの藤原忠通の孫にあたる九条良経が受け継いだことで、忠通の書風はますます盛んとなって、後嵯峨天皇の頃まで藤原忠通の書風が一世を風靡した」と書かれています。

京都国立博物館が所蔵する国宝の「藤原忠通書状案」をみると、後鳥羽天皇の筆跡より線質は太いように見られますが、特徴として、墨の濃さ、起筆の強さ、線の強弱はかなり共通した部分が見られます。さらにその子の九条兼実は、藤原忠通の書風を色濃く受け継いでいます。藤原忠通により創始された書風が、子、孫にいたるまで色濃く受け継がれているというのがわかります。この時代に在位した高倉天皇、土御門天皇、後嵯峨天皇の手紙からも藤原忠通の書風の影響が色濃く表れています。総じて、後鳥羽天皇を含めたこの時代の天皇の書は、藤原忠通の影響が大変濃いということがいえますが、その影響だけで後鳥羽天皇が自身の書風を確立するのではなく、学問することによって生まれる天皇としての自覚が必要になってきます。天皇と学問について、順徳天皇の『禁秘抄』の中に「天皇が身につけなければならない第一は学問である、統けて学ばなければ古くからの道理に暗くなり、政治をなし得ることはできない」と記しています。

そうした学問について、天皇がどういう認識を持っていたのか、花園天皇の事例を挙げます。花園天皇は、歴代の天皇の中でも非常に好学の君主として有名です。花園天皇が真剣に学間に取り組むようになった年齢と、即位する年齢が非常に近いことから、学問は天皇にとっては世を治めるための道具で、花園天皇の中に世を統べる天皇としての自覚がこの年以降芽生えたことによって、学間に接する態度にも大きな変化が起こりました。さらに、それを書へ敷衍させて、古の能筆の人達を手本に日々修練に励んできた天皇に、いかにして個々の個性が加わるのかと言え、一番最後に申し上げた天皇としての自覚というのが、プラスアルファの要因となり得ると思います。後鳥羽天皇の場合であれば、藤原忠通に似ているけれどもまたそれとは違う、文字を見ると後鳥羽天皇だと認識できる独特の書風というのは、この天皇としての自覚があるからということになるのではないかでしょうか。

このような形で「形を見る」という試み、失敗したか成功したか、私としては心もとない部分もありますけれども、長時間にわたりご清聴ありがとうございました。

講演会「世界最古の写真印刷技法

コロタイプ技法】

令和元年6月22日(土)

染色工房 京都便利堂 コロタイプ研究所長

山本 修 氏



みなさんこんにちは。便利堂の山本と申します。この度「後鳥羽天皇宸翰御手印置文」と「後鳥羽天皇像」をコロタイプと呼ばれる技法で複製させていただきました。

コロタイプという技術が発明されたのは、今から150年前です。その当時の写真は、非常に劣化しやすく、だんだんと薄くなってしましました。そこで、登場した技術がコロタイプです。幕末や明治初期の写真の焼き増しをし、なおかつ長持ちもする世界最古の印刷技術です。その仕組は、ガラス板の上にゼラチンが塗ってあり、ゼラチンの中には写真の感光剤が入っています。そこに写真のネガフィルムを密着させて焼きつけて作ったものを版に使用します。ゼラチンは牛のコラーゲンで出来ていることからコロタイプという名前がついています。堺の職人に作ってもらった特別のヘラを使って硬いインキをゼラチンの版にねじ込むので非常にしっかりとした丈夫なプリントができます。明治時代はこれが最新でした。

現在、一般的な印刷技術はオフセットです。雑誌、新聞などほとんどすべての印刷物を作っています。これは自動でカラー印刷する印刷技術で、黄・赤・青・黒の4色の色を点々に置き換えて高速でたくさんのプリントができます。オフセットで印刷してある文字を拡大すると、赤、青、黄、黒の4色の点の面積の比率を変えて、色の変化や濃淡を表現しているのが確認出来ます。あまりに小さい点なので錯覚で面に見えます。しかし、コロタイプを拡大すると点々ではなく、綺麗に線が刷られています。ですから、世界で一番古い美術雑誌の『国華』や『真美大観』の図版のページにはコロタイプが使われています。現代ではカラーの印刷技術はオフセットにみんな置き換わったのですが、「便利堂がやめたらコロタイプの技術が日本からも世界からも消えてしまうので、一生懸命コロタイプを残そう」という思いがあります。それは、単にレトロだから残すというわけではなく、コロタイプの優れた技術を残す必要があるからです。

コロタイプは基本白黒の写真印刷ですが、今回複製した「御手印置文」も「後鳥羽天皇の肖像画」もカラーです。便利堂はコロタイプでカラー印刷ができます。線がきちんと表現されていて、色の濃淡が綺麗に出ていて、和紙にリアルに表現できるのでコロタイプを続けているのです。

次に、法隆寺金堂壁画の話をさせて下さい。法隆寺の壁画を昭和10年に便利堂が撮影しました。当時、お堂を修繕することになり、お堂は解体できましたが壁画は外せないので、原寸で写真を撮ってコロタイプにすることになりました。壁画は3メートル近くだったので、細かく分割して撮りました。その当時はフィルムではなくガラス乾板と呼ばれるものだったのですが、一昨年、その便利堂の撮った「法隆寺金堂壁画」のガラス乾板が重要文化財に指定されました。昭和10年に修理が始まりましたが、戦争が激しくなって途中で中断しました。戦後、昭和24年にようやくもう一度修理ができるようになった矢先に火災が発生してしまいました。ですがコロタイプを作成していくので、原本は傷みましたが記録は残りました。そこでそのコロタイプを基に壁画を昭和42年に

再現することになったのです。白黒のコロタイプの上に色を塗るということで、当時の最高の画家の皆さんのが着彩しました。いま法隆寺に行けばお堂の中には壁画が当時の状態で再現されています。

また、高松塚古墳の壁画も、便利堂のカメラマンが撮影したので、フィルムは便利堂にあります。発掘にはカビの影響などのリスクがあるので、ものすごく慎重に調査されています。だけど発掘をされたら記録を残すことが大事なことです。そしてただ単に記録するだけではなくて、それを一般に公開することも主な使命としてされていると思います。このような記録を写真に撮って残す場合も、ルーベで拡大した時にきれいな線で印刷できるコロタイプで残す事は意義のある事です。

次に、コロタイプの製造工程を説明したいと思います。京都国立博物館に、御手印置文は保管されているので、博物館の職員の方が撮影してくださったデータをいただきコンピュータを使って色の取り出しを行います。次にフィルムが機械の中でレーザービームで絵柄を彫刻され作製されます。ここまでが現代の最新のコロタイプで、そのあとは 150 年前のやり方に戻ります。現代の技術で作ったネガフィルムを焼き台の上に置いて 150 年前の技術で作ったガラス板をその上に置いて、ガラス板とネガフィルムを密着させて、紫外線で焼くのです。150 年前に発明されたコロタイプをコンピュータを使って、古い技術と新しい技術を融合させています。

次に刷り作業です。ゼラチンの上に保水のためにグリセリンを染み込ませて、そこにインキを入れていきます。特別のヘラを使ってインキを入れて、紙を一枚一枚機械に装てんして、墨摺りができます。次に紙の地色を重ねます。黄土色やセピア色のインキを混ぜて原本の色を調合して墨摺りの上に摺り重ねると、黄土色が入った古い紙の質感が再現されます。こうやって地色が摺れます。その後に御手印を刷ります。機械には鉄板がついていてインキをローラーにまくようになっています。インキをローラーに刷り染ませていくとだんだん御手印が出てきて、刷り重ねます。こうやって版画のように一色ずつ刷るのがコロタイプの特徴です。原本とコロタイプ複製を京都国立博物館でチェックをして、相違なく刷れているか、原本合わせを繰り返してこれでよしとなれば、納品するということになります。

後鳥羽天皇の肖像画の方は、最初墨摺りをして、黄土色を墨の上にかけて、次に赤茶色、セピア色をかけて質感をつけていきます。続いて墨の周りに茶色の部分があつたり、焼けているところを印刷し、続いて周りの剥落の直した後をまた取り出してうえにかけていく、今度は後鳥羽天皇のお顔や、お着物のラインとかを取り出してかけていく、さらに鳥帽子と墨の周りのへりの黒を入れています。ということでこれは八色をかけ合わせました。コロタイプの場合はその物その物の色を掛け合わせて表現します。ここまでがコロタイプの大体の説明です。

コロタイプで複製させていただいた水無瀬神宮の社宝である後鳥羽天皇の宸翰御手印置文、肖像画の原本は京都国立博物館に安全に保存されています。複製を作ることは、万が一天変地異が起こっても複数の場所で保存しておけば、重要な文化財の資料を後世に残すということになります。現在残っている文化財の中には、原本が失われて今は写本しかないとこともあります。昔は戦乱があつたり火災があつたりして、常に原本が失われる可能性が非常に高かった。現代でも地震が起ころ、津波が起ころ、戦争があるかもしれない、いろんなことを想定すると写本を作るべきだと思います。そして、写本を通じて町の財産を皆さんにもっと身近に感じていただくことが文化財を活かす、文化財を大事にしないといけないという気持ちを育むということだと思います。だから文化財に興味をもっていただくということは、郷土の誇り、財産、宝を守るということにつながります。

講演会「島本町と東大寺」



令和元年 10月 6日（日）

島本町教育委員会

木村 友紀 氏

東大寺の莊園「水無瀬莊」が存在したことや現代にも東大寺という地名が残るよう、島本町は奈良の東大寺と縁の深い地です。「水無瀬莊」は、東大寺造営中の天宝勝宝年間に、聖武天皇の勅により東大寺に施入された莊園です。東大寺領の莊園の中でも面積が狭く、収益よりも交通の拠点をおさえる目的で東大寺に施入されたものと考えられます。その後、戦国時代頃まで東大寺領として残っていたようです。このことから、鈴谷瓦窯跡も発見当時は東大寺の瓦を焼いた窯ではないかと言われていました。しかし、現在では、東大寺の造営年代が奈良時代の中頃（750 年前後）であるのに対して、鈴谷瓦窯跡は飛鳥時代末頃の窯跡であることがわかり、東大寺造営のための瓦が焼かれた窯ではないことが判明しています。

鈴谷瓦窯跡の発掘調査は、昭和 29 年 10 月に行われ、登り窯跡が 2 基見つかりました。長期間露出していたためか、窯跡内部に瓦はほとんど残っていませんでした。少量ながら丸瓦・平瓦は見つかっていますが、文様の入った軒瓦は見つかっていません。平瓦は、奈良時代の一枚作りが普及する前の桶巻き作りで、平瓦凸面はタタキの痕跡を消すものと残すものが存在します。発掘調査は、当時、大阪府教育委員会の技師だった藤澤一夫氏が指導を行い、島本中学校（現在の島本町立第一中学校）の教諭井上栄光氏が生徒たちと発掘調査を実施しました。発掘調査後、鈴谷住宅が建てられて、現在はさらに住宅化が進んでおり、鈴谷瓦窯跡の正確な位置はわからなくなっています。また、どこの寺院にための瓦を焼いたのかもわからない謎の多い瓦窯跡です。

次に、鈴谷瓦窯跡の近くにある御所ノ平遺跡についてです。こちらから堅穴式住居が 1 基見つかっていて、その中から瓦が数点と粘土の塊が出てきています。このことから、瓦工人達が住んでいた住居跡である可能性が示唆されています。住居内から出てきた土器の年代が飛鳥時代の末頃のものであり、鈴谷瓦窯跡の年代も飛鳥時代末頃であることを裏付けられています。

ではここで、島本町の遺跡から離れて同時代の瓦を見ていきます。

世界最古の木造建築物の法隆寺五重塔の平瓦は、きれいに裏面のタタキの痕跡が消されています。元興寺極楽坊は、飛鳥寺から運ばれた日本最古の瓦が、現在も一部に葺かれていることが知られている寺院です。今回展示しているのは、平城京移転後の奈良時代に製作した瓦で、奈良時代に成立した一枚作りで作られています。

次に奈良県北葛城郡河合町の長林寺の丸瓦です。長林寺は推古 24（616）年に聖徳太子が建立したと伝えられるもので、本格的に伽藍が整ったのは 7 世紀後半のことです。今回展示している丸瓦は、鈴谷瓦窯跡の年代と近く、玉縁を用いない行基葺きの無段式の丸瓦です。

次に藤原宮の瓦です。藤原京は持統 8（694）年から和同 3（710）年の間、日本で初めて都城制を敷いた都です。今回は、藤原京の宮殿に使用された軒丸瓦と軒平瓦を展示しています。軒丸瓦は中房部分が非常に大きい複弁蓮華文で、軒平瓦には偏向唐草文が採用されています。

講演会「水無瀬駒製作と時代背景」

令和元年 10月 20日（日）

歴史文化研究所 調査員

小泉 信吾 氏



水無瀬駒は水無瀬兼成が突然と作りだしました。そのメモ帳である『将棋馬日記』（通称『駒日記』とします。）が水無瀬神宮に保存されています。いつ頃から将棋の駒を書き駒で作ったかという記録はありません。兼成の祖父にあたる三条西実隆は能書家として、また華道でも有名で当時の一流の文化人でした。『実隆公記』によると、駒文字を書いてくれという依頼があったようですが、どういう駒文字かは実物が残っていないのでわかりません。

実隆の子の三条西公条は、記録では駒文字は書いていません。この三条西公条の次男が水無瀬家の養子になり水無瀬兼成となりました。兼成は書家としても有名なので、駒文字を書く依頼が増えています。駒日記によると、戦国武将、貴族、公家、天皇、有力商人などに駒を書いています。

水無瀬駒を製作したのは、兼成と養子になった親具、兼成の嫡子の氏成、孫の兼俊です。現在残っているのは水無瀬兼成と孫の兼俊の駒です。水無瀬駒を復刻した駒師の熊澤さんが『椎』という雑誌に、駒の製作数をまとめられています。それによると、始まりは天正 18(1590)年、終わりが亡くなる 1602 年。駒数 3710 枚でかなりの数です。1590 年代は、秀吉が天下統一をして世の中が落ち着く頃で、将棋の駒だけではなくて和歌、お茶、花など文化的なものが凝縮されて非常に高度になってくる時代です。その中で作られた水無瀬駒は非常に品のある駒です。

駒の製作は、駒を削る職人を水無瀬家で抱えていて、注文があると職人が駒を作り、水無瀬さんが駒文字を書くという形で製作していたと思います。ですから何百枚もの駒を一気に納めるということは、それなりの対価を要求できたと思いますが、それについては書かれていません。

駒を納めた主たる先は、豊臣秀吉で、次に秀次です。秀次は秀吉に秀頼が生まれたことで、自害に追い込まれますが、その前に貴族の間では秀吉の後継者は秀次だということで、駒を大量に納めています。記録によると、山崎の戦いが終わった時に、兼成は天皇の勅使として秀吉のところに行って会っています。秀吉が亡くなった後、秀頼にも駒を献上しています。単に駒を作っただけではなくて、その時代背景が駒日記からわかります。

慶長 3 (1598) 年に、「象牙道休」と書いています。足利義昭が將軍を辞した後の名前が道休です。しかし、慶長 2 年に足利義昭は亡くなっているので、慶長 3 年に象牙の駒を道休に納めるというのは矛盾します。今後の研究でもっとはっきりするかなと思います。その駒は、現在福井県の方がお持ちです。実際、『駒日記』には象牙の駒が何組かありますから、その一部であるというのは確実にいえます。

次に、考古学の話です。旧大阪市文化財協会が大阪城下町を発掘した時に出土した「銀将」と「桂馬」、それから京都の御土居から出土した「銀将」の駒を比較すると、私の判断では水無瀬駒とまでは言いませんが水無瀬の範疇に入る、あるいは水無瀬を書いた駒といえると思います。水無瀬駒は分厚いです。そういうことで出土駒からみると、大阪・京都近辺にこの水無瀬駒は出ています。

次の奈良時代初頭の平城宮の軒丸瓦は複弁蓮華文であり、周囲に珠文帯と線鋸齒文が施されています。軒平瓦は均整唐草文です。奈良時代以降は、この均整唐草文が軒平瓦の文様の主流となります。

次に東大寺の瓦です。文様は同じく軒丸瓦には複弁蓮華文、軒平瓦には均整唐草文を採用しています。東大寺は、天平 15 (743) 年に大仏殿造立の詔が発せられて、天平宝字 2 (758) 年に大仏殿が竣工しています。その大仏殿建立に大きな役割を示した行基は、東大寺造営以外にも多くの寺院造営や土木工事に携わった人物です。島本町内では、若山神社や勝幡寺、尺代地区的釈恩寺、大山崎町の宝積寺が行基の開創だといわれています。『行基年譜』によると、山崎院や山崎橋が行基によって造営されており、大山崎町周辺では実際に行基が活動していたことを知ることができます。

では、鎌倉時代の瓦に移ります。東大寺大仏殿は、治承 4 (1180) 年に平重衡の焼き討ちによって焼失し、その再建に尽力したのが重源です。重源は地方から資材をかき集めて東大寺の復興を行った人物だといわれています。今回展示している軒丸瓦・軒平瓦も岡山県（備前）の万富窯で焼かれ、東大寺へ運ばれたものです。文様面に「東大寺大仏殿」と寺院やお堂の名前が書かれているのが特徴的で、展示している瓦の中で最も大きいものです。建仁 3 (1203) 年に藤原定家が水無瀬離宮を訪れた際に重源と会っており、同年の東大寺総供養の際には後鳥羽上皇も参列しています。

では次に水無瀬離宮の瓦も見たいと思います。水無瀬離宮は正治元 (1199) 年頃に後鳥羽上皇が造営した離宮で、その中心地は現在の水無瀬神宮付近だと推定されています。水無瀬離宮の範囲は文献や地形、検出した遺構の位置から、現在の広瀬や百山、桜井地区にまたがるものと考えられます。水無瀬離宮関連施設は、広瀬遺跡と西浦門前遺跡で見つかっています。宝相華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦は広瀬遺跡から出土したもので、中房に円を記す複弁蓮華文軒丸瓦と劍頭文軒平瓦は西浦門前遺跡から出土したものです。広瀬遺跡の瓦は甕棟の部分、西浦門前遺跡は築地塀に使用されたもので、同時期の東大寺の瓦と大きさの違いを見ていただきたい思います。

特殊な瓦も帝塚山大学よりお借りしているので、紹介したいと思います。

次の軒丸瓦・軒平瓦の文様は、宝塔文と呼ばれる瓦の中でも五輪塔を描いたもので、平瓦には五輪塔の文様が押印されています。軒丸瓦は蓮華文様か巴文様、軒平瓦は唐草文が採用されることが多い中、珍しい文様のものです。

安土桃山時代には、瓦の文様面に金箔を貼る金箔瓦や朝鮮半島から伝来した文様部分が逆三角形を呈する滴水瓦が登場します。

今回は、平瓦凸型成形台・平瓦凹型調整台・丸瓦凸型調整台・桔梗文の軒丸瓦の範など瓦を造るための道具もお借りしました。近世以降の瓦生産は「江戸名所図会」に、その様子を見るすることができますが、近世以前の瓦生産もほぼ同じ工程で製作されていたものと思われます。

終わりにですが、本企画展では、東大寺の瓦を焼いた窯ではないかと考えられていた鈴谷瓦窯跡と、東大寺の瓦や同時期の瓦との比較を行いました。鈴谷瓦窯跡が東大寺造営の年代が一致しないので、東大寺の瓦を焼いた瓦窯跡であるとは言い難いですが、鈴谷瓦窯跡は島本町の地域史を語る上で重要な遺跡であると考えます。軒瓦が見つかっていませんので、鈴谷瓦窯跡の瓦がどこに供給されたのかを探ることは難しいですけども、もし解明できたら島本町の古代の豪族の支配関係や国家との関わりを探ることができる重要な遺跡だと考えます。ご清聴ありがとうございました。

事業報告

企画展・催物一覧

| 開催日 | 企画展名 |
|---------------------------|-------------------------|
| 令和元年6月1日（土）～7月21日（日） | 企画展 「水無瀬神宮の社宝」 |
| 令和元年7月24日（水）～9月1日（日） | 企画展 「町内発振調査成果連報展」 |
| 令和元年10月2日（水）～12月3日（火） | 企画展 「鉢谷瓦窯跡と東大寺」 |
| 令和元年10月20日（日） | 「水無瀬駒 開運資料」の実物展示 |
| 令和元年12月5日（木）～令和2年1月26日（日） | 企画展 「島本の神事」～古代・大沢・御頭洗し～ |
| 令和2年1月29日（水）～3月1日（日） | 企画展 「むかしのくらしと農家のしごと」 |

| 開催日 | 催物 |
|---------------|--|
| 令和元年6月24日（日） | 第81回コンサート「デュロとピアノのコンサート vol. 4」 |
| 令和元年6月1日（土） | 講演会「後鳥羽上皇と水無瀬神宮」（講師：水無瀬 忠成 氏） |
| 令和元年6月2日（日） | 講演会「国宝 後鳥羽上皇像と鎌倉時代の肖像画」（講師：井並 林太郎 氏） |
| 令和元年6月9日（日） | 第82回コンサート「松永昌子ピアノで織る旅シリーズ Part VI フランス」 |
| 令和元年6月16日（日） | 講演会「後鳥羽天皇の壽」（講師：羽田 級 氏） |
| 令和元年6月22日（土） | 講演会「世界最古の写真印刷技術 コロタイプ技術」（講師：山本 修 氏） |
| 令和元年6月23日（日） | 第83回コンサート「うたのつどい ～歌にのせて～」 |
| 令和元年6月30日（日） | 第84回コンサート「フランスへ想いをはせで～フルート・ピアノ デュオリサイタル～」 |
| 令和元年7月29日（日） | 第85回コンサート「「田嶋智子 ギャイオリン デュオリサイタル」 |
| 令和元年10月5日（土） | 体験講座「ワストラップ・マグネットづくり」 |
| 令和元年10月6日（日） | 講演会「島本町と東大寺」（講師：木村 実紀 氏） |
| 令和元年10月19日（土） | 体験講座「瓦拓本体験」 |
| 令和元年10月20日（日） | 講演会「水無瀬駒製作と時代背景」（講師：小泉 信吾 氏） |
| 令和元年10月27日（日） | 講演会「やさしい古代瓦の歴史」（講師：清水 昭博 氏） |
| 令和元年11月10日（日） | 第86回コンサート「藤原清道 リコーダーリサイタル ～17世紀のイタリアとドイツのバロック音楽を楽しむ～」 |
| 令和元年11月17日（日） | 第87回コンサート「福井英里子 ヴァイオリンリサイタル vol. 5 ～リズミックな名曲を集めて～」 |

公募による催物一覧

| 開催日 | 内容 |
|---------------------------|----------------------------------|
| 平成31年4月12日（金）～4月19日（木） | 「シルバー水彩画展」 絵画クラブ |
| 平成31年4月21日（日） | 「第6回島本音楽フェスティバル」 島本町商工会青年部 |
| 令和元年5月5日（日） | 「若山神社の祭礼」 |
| 令和元年5月19日（日） | ガールズカウト大阪府第90団 |
| 令和元年5月21日（火） | 震験クラブ |
| 令和元年5月28日（火） | 「第9回詩吟発表会」 直心・青嶺吟詩会 |
| 令和元年7月2日（火）～7月9日（火） | 「七夕飾り」 島本竹公房 |
| 令和元年7月6日（土） | 古民家再生協会大阪 |
| 令和元年7月7日（日） | 「しまもと手づくりコミュニティ市」 |
| 令和元年8月25日（日） | 「かぐや姫のタペ」 島本竹公房 |
| 令和元年9月11日（水）～9月16日（月・祝） | 「零友昌木第13回写真展」 零友昌木 |
| 令和元年10月13日（日） | 「英語スピーチ学習会」 島本国際交流協会 |
| 令和元年10月22日（火・祝） | 震験クラブ |
| 令和元年10月27日（日） | 「島本の森を歩き島本の木で作ろう」 島本の森と水と健康を考える会 |
| 令和元年11月9日（土） | 「英語講演会」 島本国際交流協会 |
| 令和元年11月10日（日） | 「島本の森を歩き島本の木で作ろう」 島本の森と水と健康を考える会 |
| 令和元年12月14日（土） | 古民家再生協会大阪 |
| 平成31年4月～令和元年10月 毎週火・木・土曜日 | 「朝市」 島本町農業振興団体協議会 |
| 令和元年11月～令和2年3月 毎週火・土曜日 | 「朝市」 島本町農業振興団体協議会 |

体験講座 「瓦ストラップ・マグネットづくり」

日程：令和元年 10月 5日（土）

町内埋蔵文化財包蔵地である広瀬遺跡では、土器以外にも水無瀬離宮で使用されたと考えられる瓦が出土しています。

出土瓦の文様の範型と石粉粘土、ストラップ金具、磁石等を使用して、瓦の文様のストラップとマグネットを作成しました。



体験講座 「瓦拓本体験」

日程：令和元年 10月 19日（土）

企画展「鈴谷瓦窯跡と東大寺」の開催期間にあわせて、拓本の体験講座を開催しました。

当初 2日間を予定していましたが、内 1日は残念ながら台風で臨時休館となり中止となりました。

拓本体験には、実際に発掘調査で出土した瓦を用い、体験者はいろいろな文様の拓本に挑戦をしていました。

また、幅広い年代の方々にたくさんの方々に参加をいただきました。



資料館ボランティアの活動報告

1期、2期のみなさんと資料館担当職員で毎月一回の定期例会を開催しています。

資料館内外で企画される活動に参加・協力いただき、特に団体予約で説明を希望される来館者への解説や、対応をしていただいている。

また、「むかしのくらしと農家のしごと」展の体験学習コーナーでは、毎年協力していただいている。



企画展 「島本の神事」一尺代・大沢 御頭渡し

展示期間：令和元年12月5日（木）～ 1月26日（日）

島本の神事展では、現在も町内の各地域で引き継がれ行かれている「祭事」の様子を写真パネルで紹介しています。

今回は町内の最北に位置します『大沢・早尾神社』と『尺代・諏訪神社』の年頭行事『御頭渡し』をご覧いただきました。

御頭渡しは、年の始めに御頭人が交替するにあたり、本年の無事と五穀豊穣を祈願する神事として行われています。



企画展 「むかしのくらしと農家のしごと」

展示期間：令和2年1月29日（水）～ 3月1日（日）

冬期恒例の常設展示となりました本展は、昔使われていた民具や農具を展示し、むかしのくらしと農業について紹介しています。

令和元年度も調ない機や足踏みミシンなどの体験コーナーを設け、多くの方に体験していただきました。

毎年、社会科の体験学習に訪れる町内の小学3年生も積極的に体験し、楽しそうな様子でした。また、高学年になっても繰り返し訪ってくれる子どもたちと再会できることは、職員の喜びでもあります。



「水無瀬駒 関連資料」实物展示

展示期間：令和元年10月20日（日）

小将棋（八十二才銘）漆書、中将棋（八十六才銘）墨書の展示を行いました。普段は複製品の常設展示を行っていますが、毎年秋に実物を観ていただく機会を設けています。

同日には、「水無瀬駒」に関連した講演会を開催しました。

「水無瀬駒」が作られた時代背景や関係した戦国武将の話など、あまり知られていない水無瀬駒の話を聞く事ができました。

若手棋士の活躍もあり、将棋に興味を持つ方々が増え、「水無瀬駒」がテレビドラマでも取り上げられるようになりました。



企画展 「町内発掘調査成果速報展」

展示期間：令和元年7月24日（水）～9月1日（日）

平成30年度は水無瀬離宮跡、埋蔵文化財包蔵地外の百山地区の2件の調査を実施しましたが、百山地区的調査では、遺構・遺物の存在が希薄だったため、水無瀬離宮跡の調査成果を中心として紹介しました。

水無瀬離宮跡は、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮の中心地と考えられており、今回の調査では、鎌倉時代以前から存在する溝跡を検出しました。水無瀬離宮跡に関連する施設は検出されませんでしたが、溝跡南岸付近からは、鎌倉時代前半頃の羽釜などの煮炊具が多く出土しており、この溝跡の南で生活していた人々により投棄されたものと考えられます。



企画展 「鈴谷瓦窯跡と東大寺」

展示期間：令和元年10月2日（水）～12月3日（火）

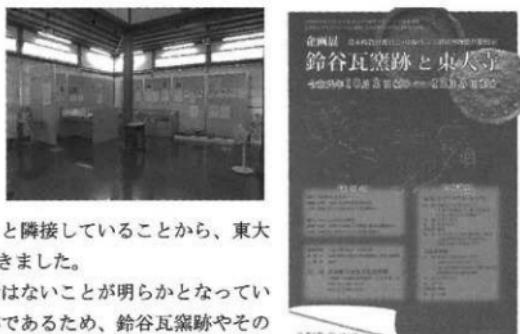
鈴谷瓦窯跡に焦点をあてて展示を行いました。

昭和29年に本町山崎地区で発掘調査が行われ、登り窯2基が存在することが確認されました。

この瓦窯跡は「鈴谷瓦窯跡」と名付けられ、その所在地が東大寺（奈良県）の莊園である「水無瀬跡」と隣接していることから、東大寺に瓦を供給した瓦窯と考えられてきました。

現在、東大寺に供給された窯跡ではないことが明らかとなっていますが、本町の歴史上、重要な遺跡であるため、鈴谷瓦窯跡やその工房跡と考えられている御所ノ平遺跡の出土遺物や調査図面等を展示了しました。

また、瓦を多く収蔵している帝塚山大学附属博物館と共に展示し、鈴谷瓦窯跡出土瓦と東大寺で使用された瓦や飛鳥時代末～奈良時代初頭の瓦を比較する展示を行いました。



講演会「やさしい古代瓦の歴史」

令和元年 10 月 27 日（日）
帝塚山大学教授・附属博物館館長
清水 昭博 氏



島本町には鈴谷瓦窯跡という非常に学術的に重要な遺跡がございますので、瓦の歴史と、鈴谷瓦窯についてお話をさせていただきます。

瓦の歴史は、日本で最初の本格的寺院である飛鳥寺が造られた 1400 年ほど前になります。飛鳥寺は非常に大規模なお寺で、約 20 万枚の瓦が使用されました。屋根の構造上、鶴尾、垂木先瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦など色々な種類の瓦が作られています。飛鳥寺の瓦は、崇峻元（588）年に、百済から来た 4 人の瓦職人が作りました。そして、飛鳥寺から出土した平瓦に、須恵器に使うあて具の痕跡が出てきことから、日本最初の瓦は百済の技術者と日本の須恵器の職人が合同で作ったことがわかります。山の斜面をトンネル状に掘って床面を階段状にした構造の窯が飛鳥寺のすぐ近くで見つかっています。また、飛鳥寺の瓦と非常によく似た瓦が、奈良県五條市、御所市、藤井寺市でも出土していることから、複数の窯で作ったこともわかっています。

その後、飛鳥寺に続く寺院建設とともに瓦が全国で作られます。飛鳥寺の軒丸瓦のデザインは、仏教の象徴である蓮華の文様です。百済の職人が作ったので、百済の瓦と似たデザインをしています。飛鳥寺の次に作られた法隆寺と四天王寺の瓦の文様は同じ木型で作られているので、瓦職人が共通するのかもしれません。また、山背の高麗寺、河内の衣縫廃寺の瓦も飛鳥寺と同じ木型の瓦が使われていることから、大和を中心に瓦作りが広がっている姿が窺えます。

その後、大化の革新（645 年）前後に瓦のデザインが変化します。飛鳥寺の瓦は蓮の花ですが、645 年前後に登場する瓦は単弁蓮華文です。このデザインも 640 年より少し前に百済で流行していく、それが日本に入ってきた。この瓦は奈良県桜井市にある吉備池廃寺で出土しています。この遺跡は 639 年に舒明天皇が建てた百済大寺という説が有力で、その背景に百済の影響が想定できます。

次に、天智天皇のころに、複弁蓮華文というデザインの瓦が登場します。天智天皇が母の齊明天皇の菩提を弔うために建立した川原寺が最初にこの瓦を使ったようです。このお寺が建てられた 660 年代は百済が滅亡した年にあたり、百済からの亡命者の中にいた技術者が瓦を作ったと想定できます。川原寺式の瓦が全国に普及している背景は、天智天皇や天武天皇の仏教政策によるものです。飛鳥寺から瓦が作られた約 100 年間は、瓦がお寺でしか使われていません。その後、お寺以外の施設で瓦が使われたのは藤原宮からです。この時から瓦はお寺の独占品でなくなりました。実際に藤原宮に使われた瓦は、川原寺の瓦と近い図柄をしています。藤原宮は 1 キロ四方くらいもある大きな施設で、そこで使う瓦は推定で 200 万枚になります。それを 694 年に都を遷す時に合わせて作らなければいけません。藤原宮の瓦は、多くは大和で焼いていますが、他に讃岐や淡路島、琵琶湖の近くの瓦窯など西日本諸国を中心にたくさんの施設で焼いていることが確認されています。そ

兼俊の後、京都から江戸のほうに文化が移って、3代将軍家光のお姫様が奥入れする時に、国宝になっています初音の調度というものの中にも駒がありまして、それをみると安清と書いていたので、水無瀬から派生したと思います。なぜ1602年以降、兼俊の頃の記録が残っていないかというと、たぶんある程度の大名、公家、商人に、駒がいきわたって需要がなくなってきたのか、あるいは水無瀬から派生した安清なり、守幸という駒も関東に行って京都にはなくなつたということです。

時代背景でもう一ついえるのは、秀吉が京都に聚楽第を建てて天皇を迎えた時に諸大名や公家を集めてお金を配るんです。金配りというのは日記にも出ています。その1年前に大判や銀錢を秀吉が大量に4万枚くらい作るんですよね。その財力の源泉は、銀山金山を全部おさえていまして、自分のところで貨幣を管理して、その数分の一を大名や公家に配るわけです。聚楽第に並べて配ったという記録があります。それに呼応して、秀次が閑白になった時に駒を納めています。その後秀次は、自害せられて、聚落第も壊されます。ですから聚落第周辺から、駒が出てこないかなと思っているのですが、この御土居から出土しているものもその関係かなと思います。

では納めた大将棋はどこへいったのかと思うんですけども、全然ないんです。水無瀬家に残っている大将棋、中将棋、小将棋の駒しかない。もしさだ将棋の駒があれば、実際に納めたというのがわかります。私の研究では、水無瀬さんが納める際に中将棋以降、大将棋、大々将棋、魔団大々将棋、大将棋というふうにして納めたとするとかなりの駒数になるので、それにあたう対価を秀次あるいは秀頼からもらったと思います。関ヶ原で負けましたけども、まだまだ豊臣家には財力がありまして、家康はその財力を心配していたわけです。そこで方広寺鐘銘事件というのがありますと、方広寺の大仏を作る時に豊臣家にあった金を使わんですね。

『駒日記』をつぶさに読むと、等安、木庵というのが出てきます。それを調べたら長崎奉行の村山等安という方で、後に失脚するんですが、その人が水無瀬兼成に駒を依頼しているわけで、そういう経済的な流れもわかるので『駒日記』は非常に面白い要素があります。ただ兼成が注文者の名前を省略して書いているので、官位、あるいは公家はわかりますが、通称で書かれている場合はわかりません。あと2~3年くらいかけて調査すれば、単に水無瀬さんが駒を作つて納めたではなくて、いろんなことがわかると思います。

また、『象戯図』を見ると、あれだけの巻物を一字も間違わずに書いています。これはすごいことです。この巻物は、秀次、あるいは秀吉に納めた時の控えだと思います。中将棋の製作は実際に経験しているから職人さんもすぐ作れます、大将棋、大々将棋、魔団大々将棋となると、駒数だけでも多いですから、『象戯図』を見ながら作っていた可能性が高いです。

今後、三条西実隆が書いた駒がどこかの貴族の館から出してくれれば面白いと思います。時々整理しきれていない貴族の蔵から新たに駒なり、こういう駒日記が発見される可能性もあります。

逆にいえば、水無瀬さんにこの象戯図と駒がよく残っていたと思います。その辺は応仁の乱など戦乱があって、あるいは戦乱以外に鴨川の氾濫、あるいは大きな火事もあります。幸い水無瀬は京都から離れていて戦火を逃れていたので残ったのかなという気もします。

そう思つて水無瀬駒を見ていただくと、やっぱり品格のある美しい駒がこの時期に完成していたといえます。五角形の駒の中にゆったりと書かれた完成美だと思います。これ以上のバランスのとれた文字の配置というのは、これ以降あまりないです。その筆法で書かれている『象戯図』ですから、ご覧になつていただいたらと思います。

入館団体

平成 31 年度 (2019)

| | | | | |
|-------|----------------------------------|--------|-----------------------------|-----|
| 4月14日 | 医師と歩こうハートの会（高槻市） | 9月28日 | 車友会 | 2団体 |
| 4月18日 | 新規採用職員研修施設見学（島本町） | 11月10日 | 新崎大阪 | |
| 5月2日 | あせびの会 | 11月16日 | けやきの会（高槻市） | |
| 5月4日 | 京都百人一首かるた研究会（京都市） | 11月17日 | 京都産業大学付属高等学校（京都市） | |
| 5月6日 | 豊中市場田会館老人会（豊中市） | 11月21日 | たかつき市民環境大学OB会（高槻市） | 3団体 |
| 6月8日 | 茨木高校 歴史探検サークル（茨木市） | 11月24日 | 帝塚山大学（奈良市） | |
| 6月14日 | マッセ大阪職員研修 | 1月10日 | 近畿郵政退職者共助会阪神支部ハイキングクラブ（西宮市） | |
| 6月19日 | 島本町教職員初任者研修（島本町） | 1月12日 | 開電ぼっとまむツアーノ（岡山県） | 3団体 |
| 7月9日 | ONCC中世史教室（老人カレッジ） | 1月23日 | 島本町介助福祉ボランティア（島本町） | |
| 7月17日 | NHK文化センター | 2月6日 | 第二小学校3年生体験学習（島本町） | |
| 7月25日 | 社会福祉法人 和楽会デイサービスセンター 花榮（長岡京市） | 2月7日 | 第三小学校3年生体験学習（島本町） | |
| 8月22日 | 下村塾・下村俱楽部（三重県津市） | 2月14日 | 第四小学校3年生体験学習（島本町） | |
| 9月28日 | JR OB会 有志会 | 2月18日 | 第一小学校3年生体験学習（島本町） | 4団体 |

年間 26 団体入館

利用状況

平成 31 年度入館者数

| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 計 |
|-----------|-------|-------|-------|-----|-----|-------|-----|-------|-----|-----|-----|----|--------|
| 一般入館者数 | 1,330 | 932 | 623 | 874 | 754 | 1,030 | 779 | 892 | 574 | 615 | 647 | 45 | 9,095 |
| 講演会等 受講者数 | 0 | 0 | 193 | 0 | 0 | 0 | 84 | 0 | 0 | 0 | 314 | 0 | 591 |
| コンサート入館者数 | 0 | 71 | 383 | 0 | 0 | 34 | 0 | 116 | 0 | 0 | 0 | 0 | 604 |
| 総入館者数 | 1,330 | 1,003 | 1,199 | 874 | 754 | 1,064 | 863 | 1,008 | 574 | 615 | 961 | 45 | 10,290 |

寄贈・寄託

平成 31 年度は 807 点の寄贈いただきました。

| 内容 | 点数 | 内容 | 点数 |
|---------|----|------------|-------|
| 衣装・装身具 | 1 | 交通・運輸・通信 | 133 |
| 食生活用具 | 32 | 交易 | 51 |
| 住居用具 | 4 | 民俗芸能・遊戯・娯楽 | 18 |
| 稻作農具 | 2 | 文書 | 471 |
| 稻作以外の生業 | 1 | その他 | 94 |
| 合計 | | | 807 点 |

町指定文化財一覧

島本町文化財保護条例が平成 20 年 7 月 1 日に施行されました。

島本町文化財保護審議会にて審議していただき、下記の文化財を指定しました。

平成 21 年度 島本町指定文化財 第 1 号

| | |
|-------|--|
| 名 称 | 水無瀬駒 関連資料 |
| 指 定 日 | 平成 21 年 4 月 14 日 |
| 所 有 者 | 水無瀬神宮（個人） |
| 所 在 地 | 広瀬三丁目 |
| 種 類 | 有形文化財 |
| 種 別 | 美術工芸品（歴史資料） |
| 員 数 | 小将棋（漆書・八十二才銘）一揃 合計 39 枚 飛車が欠落 中将棋（墨書・八十六才銘）一揃 合計 91 枚 歩兵が欠落 中将棋（漆書）残欠四枚 象戯囲 一巻、附 象戯囲 一巻 |
| 時 代 | 安土桃山時代 |



平成 22 年度 島本町指定文化財 第 2 号

| | |
|-------|--------------------|
| 名 称 | 神像（伝 聖德太子七歳像） |
| 指 定 日 | 平成 22 年 4 月 5 日 |
| 所 有 者 | 若山神社 |
| 所 在 地 | 大阪市立美術館 寄託 |
| 種 類 | 有形文化財 |
| 種 别 | 美術工芸品（彫刻） |
| 員 数 | 1 枠 |
| 品質・形状 | ヒノキ材・一木造り・彫眼・彩色仕上げ |
| 法 量 | 像高 35.8cm |
| 時 代 | 平安時代後期 |



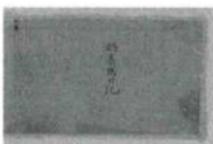
平成 23 年度 島本町指定文化財 第 3 号

| | |
|-------|--------------------|
| 名 称 | 宝城庵 薬師如来立像 |
| 指 定 日 | 平成 23 年 4 月 1 日 |
| 所 有 者 | 宝城庵 |
| 所 在 地 | 桜井三丁目 |
| 種 類 | 有形文化財 |
| 種 别 | 美術工芸品（彫刻） |
| 員 数 | 1 枠 |
| 品質・形状 | ヒノキ材・一木造り・彫眼・彩色仕上げ |
| 法 量 | 像高 96.5cm |
| 時 代 | 平安時代後期 |



平成 23 年度 島本町指定文化財 第 1 号追加

| | |
|-------|-----------------|
| 名 称 | 將葉馬日記 |
| 指 定 日 | 平成 23 年 4 月 1 日 |
| 所 有 者 | 水無瀬神宮（個人） |
| 所 在 地 | 広瀬三丁目 |
| 種 類 | 有形文化財 |
| 種 别 | 美術工芸品（歴史資料） |
| 時 代 | 17 世紀初期 |
| 員 数 | 一冊 |



平成 24 年度 島本町指定文化財 第 4 号

| | |
|---------|---------------------|
| 名 称 | 勝幡寺 薬師如来立像 |
| 指 定 日 | 平成 24 年 4 月 1 日 |
| 所 有 者 | 勝幡寺 |
| 所 在 地 | 山崎四丁目 |
| 種 類 | 有形文化財 |
| 種 別 | 美術工芸品（彫刻） |
| 員 数 | 1 個 |
| 品 質・形 状 | ヒノキ材・削ぎ造りか・彫眼・漆箔仕上げ |
| 法 量 | 像高 150.1cm |
| 時 代 | 鎌倉時代 |



平成 26 年度 島本町指定文化財 第 5 号

| | |
|-------|-----------------------------|
| 名 称 | 勝幡寺 元三大師みくじ関係資料 一式 |
| 指 定 日 | 平成 26 年 4 月 1 日 |
| 所 有 者 | 勝幡寺 |
| 所 在 地 | 山崎四丁目 |
| 種 類 | 有形文化財 |
| 種 别 | 民俗（有形民俗） |
| 時 代 | 江戸時代（一部推定を含む） |
| 品 目 | みくじ箋の版木、みくじ箱、 みくじ竹、みくじ算筒 |



平成 27 年度 島本町指定文化財 第 6 号

| | |
|-------|--|
| 名 称 | 須恵器 大甕 |
| 指 定 日 | 平成 27 年 4 月 1 日 |
| 所 有 者 | 島本町教育委員会 |
| 所 在 地 | 桜井二丁目 |
| 種 類 | 有形文化財 |
| 種 别 | 美術工芸品（考古資料） |
| 員 数 | 1 口 |
| 法 量 | 口径 52.6 cm 器高 105.0 cm 最大胴部径 107.8 cm (底部から 65.9 cm の地点) 容量 522.6l |
| 時 代 | 奈良時代末期から平安時代 |



平成 29 年度 島本町指定文化財 第 7 号

| | |
|-------|--|
| 名 称 | 若山神社 絵馬 |
| 指 定 日 | 平成 30 年 1 月 15 日 |
| 所 有 者 | 若山神社 |
| 所 在 地 | 字広瀬 1497 |
| 種 類 | 有形文化財 |
| 種 别 | 民俗（有形民俗） |
| 時 代 | 江戸時代 |
| 員 数 | 曳馬図絵馬 1 一面 曳馬図絵馬 2 一面 猿猴乗馬図絵馬 一面 竹虎図絵馬 一面 |



曳馬図絵馬 1

島本町立歴史文化資料館 館報 第12号
平成31年度版(2019)

発行 島本町教育委員会

〒618-8570

大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号

TEL 075-961-5151

発行日 令和3年3月

印刷 株式会社 西川印刷所

〒567-0828

大阪府茨木市舟木町18-30

TEL 072-634-7644

